

巻頭言

新センター長から： 東北アジア研究の新しい課題

高倉浩樹（センター長、教授）

2022年のロシアのウクライナ侵略にはじまる「戦争」以降、東北アジア研究をとりまく社会環境は大きく変わった。この出来事によって、対立のグローバリズムへと世界は変わってしまったからだ。すでに構造的な変化の兆しはあったが、それが不可逆的なものであることを決定づけたと言っても良い。

東北アジア研究センターは1996年に発足し、その始まりは冷戦終結による旧ソ連と東アジアの交流開始がきっかけであった。それゆえにロシア・中国・日本などに跨がる環境問題の解決や経済交流を実現するための学際的知識を紡ぎ出すことが社会に求められていた。今後は、この地域の過去と現在における対立・紛争・戦争の起源とその対応や解決への道筋というテーマが中心になるのではないと思う。それは、諸研究分野の問題意識や方法はもちろんのこと、学際的研究の枠組みにまで及ぶのではないかと考えている。

数年前から東北大学の社会にインパクトある研究事業で、隣国理解としての東北アジア研究という課題を探求してきた。昨年は隣国としてロシアを理解するための連続講座をオンラインで高校生向けに実施した。マスコミで報道されていないロシアの姿を多数の専門家が講義したが、熱心な高校生の受講と質疑があつてとても充実したものとなった。ロシアを含む東北アジアの理解が今ほど社会的に求められているときは無いと感じる経験と



なった。さらにいえば、権威主義国家としてロシアや中国を理解することの必要性を痛感している。この体制のなかで何が起きているのか、そして人びとはどのように暮らしているのか、日本を含む他の世界との関わりをどのように構築すべきかなど、課題は多い。センターとしても、過去と現在の分析を新しい手法の開発も含めて実施しなくてはならない。とりわけ今後はこの地域の平和共存へ資する学際的知識を発掘していくことがより一層重要になっていくと考えている。

東北アジア研究センターの強みは、人文学・社会科学・自然科学の個々の専門分野において世界的に活躍する優れた研究者がいることだけでなく、彼らが文理を超えた学際的協力を実施してきたという点にある。この点は我々の誇るべき点である。生物学と歴史学・考古学、人類学と水文学・地質学など枚挙にいとまがないが、その文理を含む学際的な研究成果は、国際的にも着目されている。こうした基盤のもとに、私たちは新しい東北アジア研究を発展させていかねばならないと思うのである。

contents

- 1 巻頭言
- 2 私の東北アジア研究
- 3 新任ごあいさつ
- 4 最新の研究会・シンポジウム、展示会ほか
- 5 著書・論文紹介
- 6 活動風景



私の東北アジア研究

トランスナショナルな実践とアイデンティティ

朴 歆

ロシア・シベリア研究分野／学術研究員



ロシア・朝鮮民主主義人民共和国と国境を接する中国東北部の延辺朝鮮族自治州 (Yanbian Korean Autonomous Prefecture) には、古くからコリアンが集居していた。特に豆満江 (トゥマンガン、Tumen River) 沿岸一帯は、「朝鮮北部の朝鮮人が夏はシベリアで働き、冬は食糧が豊富で住みやすい延辺で過ごし、このようなことを数年間繰り返して、少しまとまった金がたまると朝鮮に帰ってくるというふうに、国境を自由に往来していた」[鶴嶋雪嶺 1997: 3] という記録がある。このように、豆満江沿岸一帯には、自然村を基盤に歴史的連続性によって構築された親戚・同郷関係が国境を跨いで形成されていた。



トゥマンガン(Tumen River)
2019/08/14 15:32 筆者撮影

私はこれまで、ポストコロニアルな状況、冷戦と祖国の分断、またグローバリゼーションという状況のもとで、東アジア社会の各地に離散し、取り残されたコリアンの移動とアイデンティティの形成・変容の過程に着目した研究を行ってきた。これまでの研究は、コリアン・チャイニーズ (朝鮮族) に焦点が当てられている。

コリアンの移動性に着目した研究は、私自身のオートエスノグラフィー的な文脈につながることである。私の祖母は

1943年生まれで、その年に曾祖父は、家族を連れて朝鮮半島南部から中国東北部に移住した。中国東北部へのコリアンの移住史的観点から見ると、私は移民4世である。私は中国生まれのコリアンであり、10歳から4年を韓国で過ごしてから、再び中国に戻って暮らし、大学卒業後は日本で学業を継続した。私は、10歳ごろに韓国では「中国人」と呼ばれ、14歳ごろには中国で同級生 (中国国籍の朝鮮族の人びと) に「韓国人」と呼ばれていた。その延長線上にあるような、自分自身を定義できないままの宙吊りの状態 [山口昌男 1975] が継続するところで、私は多様なコミュニティと接触し、関係を作った。それは、どこにいても中途半端という現実が生み出す「すべてに属すると同時にどこにも属さない」[Pollock & Van Reken, 1999 訳 2010] 感覚の連続だった。

このような文化的背景と移動の経験から、コリアンの移動性に関心を持ち、中朝国境におけるトランスナショナルな移動と実践に関わった人びとを対象にインタビュー調査を行った。その中で、朝鮮族の国境を越えて行う小規模出稼ぎ「ポッタリチャンサ」に着目し、複数の国家に帰属する多元的意識の形成をトランスナショナリズムの文脈の中で検討してきた。

ここで重要なのは、朝鮮半島北部及び中国東北部におけるトランスナショナリズムは、はじめに国境が存在し、そこに移民が入ることによって多方向的な移動が現れる従来のトランスナショナリズムの「発見」の文脈とは異なる様相が示された点にある。これらの地域におけるトランスナショナリズムは、歴史的な生活空間が存在し、その空間が人びとによって利用されてきたところで、国民国家のシ

ステム、国家政策が徐々に介入し、さまざまな国家装置が成り立って強化されていく過程で現れた現象である。一方、朝鮮族の人びとが国境を越えて行ってきた「ポッタリチャンサ」の生活実践は、コリアンの文化的価値の維持、社会構造の変化を浮き彫りにしながら、彼らの多元的帰属意識の形成過程の一端を示すものとしてその機能を果たしていたのである。

今後の研究ではフィールドを拡張し、比較研究に取り組むことによって議論を深めていきたいと考えている。



インフォーマント(U氏)が北朝鮮で購入した日本製のスカーフ
2018/08/22 11:30 筆者撮影

#1



Jaroslava Panakova

客員准教授〔2024.4～2024.6〕

ヤロスラヴァ・パナーコヴァ ▶ スロバキア科学アカデミー（ブラティスラバ）民族学・社会人類学研究所上級研究員。セントペテルブルク国立大学文化社会学博士号取得。ブラハ芸術アカデミー映像学部（FAMU）ドキュメンタリーフィルム科修士号取得。

知覚の共感覚：北極圏ペーリンジアにおける気候変動の感覚的理解

私はセントペテルブルクおよびチュコトカにて北方民族に関するフィールド調査を行っており、一時的な移住、先住民の観光事業、アイデンティティについて比較的観点から検討しています。また、ソ連およびソ連崩壊後のさまざまなジャンルの視覚的表現と自己成型に焦点を当てた考察をしています。現在、死と追悼の視覚性に関する書籍を執筆中です。近年の研究対象には、嗅覚と生態人類学も含まれており、北極圏のツンドラとカルパティア草原の両者についての研究に感覚的かつマルチモーダルな方法論の導入を試みています。センターでは、more-than-human（人間以上）のコミュニケーションにおける共感覚の可能性を探求し、現在進行中の気候変動下における生物種の共生についての理解を深めることを目指しています。私が収集した民族誌データに基づき、感覚の分化のプロセス（例：許容と非許容、有用性と冗長性）が、永久凍土の景観における生態学的リスクやエコトピア的混乱の認知にどのように影響するかを検討しています。

ペルー・中央アンデス高地の牧畜社会の研究

私はこれまで南米ペルーの中央アンデス高地でフィールドワークを行い、アルパカ・リャマを飼養する牧畜について研究を行ってきました。幼い頃に世界遺産であるマチュピチュに憧れを抱いたことがペルーに興味を持ったきっかけでした。大学では当初考古学を勉強していましたが、過去の社会ではなく現在生きている人々に興味移っていき、そのなかでも自身とはかけ離れた生活を送っているように思えた牧畜社会を研究テーマに選びました。

アンデス牧畜には家畜のアルパカ・リャマとその野生原種のビクーニャ・グアナコが同じ地域で共存しているという特徴があります。家畜と野生の共存というのはシベリアのトナカイ牧畜とも共通している興味深い特徴です。アンデス牧畜もシベリア牧畜も、文化人類学の牧畜研究のなかでは周縁的な事例としてあつかわれる傾向がありましたが、両者を比較・分析することで、牧畜社会の多様性について新しい視座を提供したいと考えています。どうぞ宜しくお願いいたします。

#2

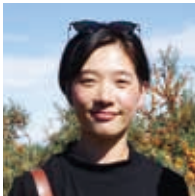


佃麻美

学術交流分野／特任研究員（学振PD）

つくだ・あさみ ▶ 2020年京都大学大学院人間・環境学研究科単位取得退学。博士（人間・環境学、京都大学）。学振特別研究員（DC1）などを経て現職。

#3



寺尾萌

マイノリティの権利とメディア研究連携ユニット／学術研究員

てらお・もえ ▶ 2024年4月～2026年3月。2020年東京都立大学人文科学研究科博士後期課程単位取得満期退学。博士（社会人類学）。2022年4月～2024年3月鹿児島大学法文学部特任研究員の後現職。

儀礼・訪問・交換からみるモンゴル国牧畜地域の社会・経済

2024年4月よりプロジェクト研究部門に学術研究員として着任いたしました、寺尾萌と申します。社会人類学を専門とし、これまでモンゴル国の牧畜地域の社会的な相互行為様式から「他者に対する身構え」を探究する研究を行ってきました。また草原－定住地－都市間の人・モノ・畜産物の移動を追いながら、社会的ネットワークの動態を明らかにする研究も行ってきました。本センターでは、畜産物の生産・流通ネットワークに関する調査研究を行います。モンゴルの畜産物というとカシミアや羊毛などの獣毛が有名で、牧畜民の主要な収入源となっていますが、私は近年、原皮・なめし革の取引に注目しています。これらの畜産物は近年、ロシアや中国といった近隣の大国とのあいだの取引量・価格が下落しており、その経済・政治的背景や、その他の地域との取引の新たな展開の調査を行っています。それを通じてモンゴルの牧畜民の生業や地域経済を同時代のグローバル経済のなかで読み解くことを試みます。

#4



長谷和子

学術交流分野／客員研究支援者
[2024.2～2025.3]

はせ・かずこ ▶ 東京都出身。2015年
東京大学大学院総合文化研究科修士。
JSPS 特別研究員などを経て2023年より
東北大学生命科学研究科助教（研究
特任）

進化的行動生態学の知見を生かし、人と蛙の相互理解、 文化的共存を目指す

私は両生類を対象に、多様性が社会性の進化や集団の維持メカニズムにどのように関わっているか、血縁者識別、数量認識、遺伝的多型などを調べています。オタマジャクシの一部には兄弟と他人を識別する能力を持ち、種内競争を緩和しているものがあります。この認識メカニズムは遺伝的背景だけでなく、幼生期の環境が重要なことも分かってきました。オタマジャクシも「誰が仲間か」学習するようです。また、院生時代から都市部の両生類の移入問題、遺伝的攪乱、環境保全についても取り組んでいます。東京では、西日本から持ち込まれたヒキガエルと在来ヒキガエルの間で交雑が起こっており、個体数も近年急速に減少しています。西日本のヒキガエルは、明治時代に実験や商業目的で大量に持ち込まれたようです。仙台市にも同様に西日本から持ち込まれた過去があるようで、現在調査中です。本センターではこれまでの知見を活かし、人と野生種との共存について、街の歴史や文化史を取り込んだ文理融合型の研究を展開していきたいと思っています。

真実を求める、厄介な真実も含めて

単純な、ポストモダン等総括的な理論を受け入れられない、徹底したフィールドワークを元にして「客観的な真実」を求める古いタイプの社会人類学者です。政治的に進歩的ですが、「ホームレスには怠け者、あるいは浮浪者のライフスタイルを選んだ人も一部いる」と思います。同様に、福島原発事故のせいで故郷を離れた人の一部は豊富な賠償金を受け取ったから内々「よかった」と思っているはずですが、そして、原発反対は不動ですが、福島県民には大きな健康の問題が発生しないと私は考えます。放射能の量、放射性同位体の半減期、避難のタイミングなど具体的なデータを分析すればその結論になります。自然科学者の殆どはそう信じていますが、「悪質な国家、被害者の市民」という固定観念を持つ社会科学者の一部はそれを認めたがりません。放射能による被害より、放射能の恐怖の方が福島県民の健康に害を与えているから政府・東電はもちろん、環境保護団体や正義の味方を演じる学者、評論家、ジャーナリストも責任があると思います。

#5



Tom Gill

学術交流分野／客員研究員
[2024.4.1～2025.1.31]

トム・ギル ▶ 英国人の社会人類学者。
63歳。日雇労働者、ホームレス他、
都市貧困層を調査。東日本大震災以
来、福島原発事故の被災者も調査中。

#6



Victoria Peemot

学術交流分野／学振外国人特別
研究員 [2024.3～2025.2]

ヴィクトリア・ピーモット ▶ ヘルシンキ
大学で博士号取得後、Kone Foundation
より助成を受けヘルシンキ大学先住民研
究部門のKone研究員をへて日本学術振
興会外国人特別研究員（東北大学）。

内陸アジアのアルタイ・サヤン山脈における人間と非人間の共生

私は、内陸アジアのアルタイ・サヤン山脈の国境を越えた山岳地帯における遊牧の民族誌学を専門とする文化人類学者です。研究テーマは、先住民族の研究認識論、more than human（人間以上）の社会性、博物館人類学、サステナビリティ学、アーカイブ研究です。今年、初めての単著『The Horse in My Blood: Multispecies Kinship in the Altai and Saian Mountains』（Berghahn Books, 2024）を刊行しました。この中では、牧畜コミュニティとの密接な関係と、馬術の実践に関する知識をもとに、トゥワの牧畜民とその馬、そして故郷がいかに不当な扱いを受け、more than humanの団結としてレジリエンス戦略を考案してきたかを探求しています。また、景観・人間・声の関係を調査する2部構成のエスノグラフィ・フィルム・シリーズ“Nonhuman Attainments”を共同制作しています。現在、国際的なプロジェクトの枠組みの中で、「Biocultural Heritage and Nonlinear Time（生物文化遺産と非線形時間）」、「Sensory Acts（感覚的的行為）」、「Militarisation of Indigenous Peoples in Russia During the War（戦争中のロシアにおける先住民の軍事化）」といった研究を進めています。

公開講演会

ロシアによるウクライナ侵攻を契機に庇護希望者・難民を考える



高倉浩樹

(ロシア・シベリア研究分野/教授)

会期 2024年2月10日

会場 東北大学片平さくらホール

2024年2月10日に東北大学片平さくらホール(ハイブリッド開催)で、ウクライナ侵攻にかかわる難民・庇護希望者に関する法学的アプローチからの公開講演会が、岡洋樹氏の司会で行われた。

講演の最初は岸見太一氏(福島大学准教授)による「カテゴリーから考える:〈難民〉へのステレオタイプはどのように構築され、どのように作用するのか」、続いて安藤由香里氏(富山大学教授)の「難民条約における難民とは誰か?」、三番目の坂東雄介氏(小樽商科大学教授)は「日本版補完的保護のゆくえ」であった。これにくわえてコメンテーターの小坂田裕子氏(中央

大学)は、「福島第一原発事故による避難民は難民か?国際人権法上、どのような権利があるのか?」と題して議論を提起した。政治哲学・法学・国際法の立場からの講演と議論は、ウクライナ問題が対岸の事象として理解すべきものではなく、日本の制度や多文化共生にかかわる倫理と関係していることを訴えるものであった。

この講演会は、人間文化研究機構グローバル地域研究事業東ユーラシア研究プロジェクト東北大学拠点との共催事業であり、東北大学国際法政策センターが後援となった。参加者は50名弱だったが、従来センターが接点を持たなかった法学分野との共同で地域研究をおこなっていくこと

の必要性と可能性を感じさせるものとなった。



ポスター

市民公開講演会

北極域研究加速プロジェクト公開イベント
「北極の島グリーンランドの暮らしと気候変動」

デレーニ・アリーン

(日本・朝鮮半島研究分野/准教授)

会期 2024年2月3日

会場 日本科学未来館(東京都)

この市民公開講演会では、世界で最も気候変動の影響を受けている場所のひとつであるグリーンランドが紹介された。登壇者は、水産品輸入関係者、研究者、写真家、現地の活

動家で、グリーンランドの人々と海とのつながりについて、漁業、狩猟、伝統文化、現代社会など、さまざまな角度から語られた。

主催者のアリーン・デレーニによる開会挨拶と、東アジアにおけるグリーンランド政府代表であるヤコブ・イスボセン氏の歓迎挨拶に続き、ロイヤル・グリーンランド・ジャパンのマネージングディレクターである下田高明氏から、日本におけるグリーンランド産水産物の歴史について紹介された。グリーンランド最大の産業は漁業であり、東アジアはグリーンランドの水産製品にとって重要な輸出先になっている。北海道大学の富安信助教からは、北グリーンランドの最新漁業

に関する地元漁師との共同研究が報告された。

話題はグリーンランドの自然の美しさと脅威へと移り、北極域の人々の生活を記録するプロ写真家である遠藤励さんからは気候変動のビジュアル・ドキュメントが報告された。彼はカナック地域でクジラ、シロクマ、アザラシを狩るハンターに数ヶ月間同行した。最後の報告者であるピパルク・ルッケさんからは、溺れることの危険性と青少年への海の安全教育について報告された。

講演後には30分の質疑応答時間が設けられた。報告者とおおよそ100名の参加者、および参加者間の交流も含めて、講演会は成功裏に終了した。



イベント後の講演者と東北大学の学生ヘルパー

公開講演会

大崎市初めての古文書講座



荒武賢一朗

(上廣歴史資料学研究部門／教授)

会期 2024年3月2日

会場 大崎生涯学習センター(パレットおおさき、宮城県大崎市)

大崎市岩出山公民館(宮城県)では、毎年「初めての古文書講座」を開講し、歴史資料の解説をしてみたいという人びとが学習に励んでいる。その関連行事として公開講演会(大



自家専用井(ここから水をくみ上げる)

崎市岩出山公民館・岩出山古文書を読む会主催)が開催され、荒武賢一朗「人びとの生活を潤す—近代古川の水道敷設—」と題して、明治時代の古川村(現・大崎市)で水道敷設を主導した永澤才吉(1840年生～1936年没)たちの足跡を紹介した。

日本で初めて「近代水道」を導入した都市は横浜で、明治18年(1885)に建設着手、同20年に給水開始を実現した。近代水道の条件は、①有圧送水・②濾過浄水・③常時給水で、それに伴う技術として鑄鉄管・砂濾過・ポンプの設備が揃うことにある。古川では横浜の2年前、明治16年(1883)に水道敷設工事を開始し、翌年に5,481人(942戸、古川地域における人口の約83%)の住民へ水を届け

ることができた。ただし、横浜ではイギリスから輸入した鑄鉄管を、古川では工費節減により地元で製造した土管を使用したため、当時の古川水道は先述した近代水道の条件を満たしていないが、江戸時代の水道とは明らかに異なる新しい手法を導入したことが指摘できる。

以前担当した授業で、受講生たちが「自宅で使う水はどこからきているのか?」という疑問に取り組んだ。これは興味深い結果をそれぞれ示してくれたが、実は地域によって「水のみち(水道供給の方法)」は多種多様である。最近は、自治体の水道局などのウェブサイトで有益な情報が充実しているの、ぜひ御覧をいただきたい。

ワークショップ

戦争記憶研究の新展開を探る



石井弓

(中国研究分野／准教授)

会期 2024年3月4日～5日

会場 東北アジア研究センター 436 大会議室／101 ラウンジ

ロシアによるウクライナ侵攻以来、世界の趨勢は協調から対立へと大きく舵を切った。CNEAS「戦争記憶の国際比較研究」では、このような現実と向き合い、紛争の帰結であり対立の起源ともなる戦争記憶のありようを、国際比較と学際的な視点から捉えてきた。3月4日、5日に行ったワークショップでは、2023年度の研究活動を総括して、ロシア、中国、台湾、ベトナム、日本を対象とし、文学、歴史学、人類学、心理学を専門とする6名の研究者が研究発表と議論を行った。

戦後日本における戦争記憶研究は多様に変化してきた。かつては戦争実態を明らかにすることが中心だったが、90

年代に「集合的記憶」や「文化的記憶」といった構築主義的な記憶の研究が主流となり、近年では、記憶(特にトラウマ記憶)が世代間で継承され人々や社会に影響を与え続ける現象に問題関心が向かいつつある。こうした研究は方法論的な模索段階にあるため、WSでは戦争記憶研究の方法論的新展開をテーマとした。

1日目は石井より方法論に関する問題提起を行い、それに対して各参加者が応答し、併せて戦争(災厄を含む)記憶に関する最近の研究状況を報告した。発表者の対象国や地域が多様であるために、各地域の記憶が相対化される一方、方法論はまともならず、議論は持ち越しとなった。

2日目の午前是中国映画『鬼が来た!』

の戦争描写を中国演劇論の田村容子氏(北大)が解説し、撮影手法、役者や監督の心理状態に至るまで議論が及んだ。午後は「台湾先住民集落における植民地戦争の記憶」を社会人類学の中村平氏(広島大)が発表し、植民地戦争と加害の記憶を巡る議論が展開した。一般の参加者から学校教育に対するアカデミズムの働きかけが求められるなど、この問題関心が広く社会と繋がることが改めて認識された。



ワークショップポスター

ウェブ記事

祭りや民俗芸能が被災するとはどういうことか。 復興における「小さな公共性」の役割【能登半島地震】

イ ンターネットメディアのHUFFPOSTに、表題で高倉浩樹教授の取材記事が掲載された。

1月1日に発生した能登半島地震では、民俗芸能が道具の逸失や避難長期化によるコミュニティの解体により、存続が危ぶまれる事態が生じている。同様のことで2011年の東日本大震災でも発生した。この時の調査からわかったことと、その経験から、能登半島地震で祭りなど



https://www.huffingtonpost.jp/entry/story_jp_65cef002e4b0f7f7be7b22740

ウェブ記事

客員教授 Donatas Brandisauskas 先生の 特別講演会

本 センターに客員教授として滞在した Donatas Brandisauskas 先生(ニューズレター 100号参照)の特別講演会が3月21日に開催された。

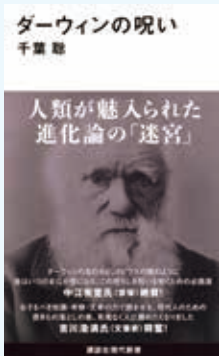
トナカイ狩猟牧畜民である先住民にとって、クマは害獣であるとともに、ヒトと霊的世界をつなぐ媒介ともされている。講演では先住民がクマを特別視しているものの、彼らはその存在を「種」ではなく、「個体」として認識していることなどが示された。詳しくはウェブ記事をご覧ください。



<http://www2.cneas.tohoku.ac.jp/news/news240325.html>



RECENT PUBLICATIONS



ISBN 4065336910

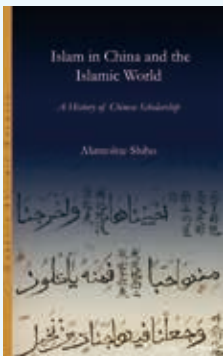
ダーウィンの呪い

千葉聡著 小段者 2023年11月刊

text: 千葉聡

ダーウィンを祖として発展した進化学は、ゲノム科学の発展とともに医学、農学を始め多くの分野に多大な貢献をしている。しかしダーウィ人が提唱した「進化論」は政治・経済・文化・社会思想にも大きな影響を与えたのみならず、進化論を曲解した人々により、優生学を広めることになった。そうした人々の中には、一流の進化学者たちが含まれ、彼らによって権威づけられた

優生学は、欧米の科学者や文化人、政治家らの支持を得て、最終的にナチスの反ユダヤ思想とつながり、ホロコーストの悲劇を導いた。本来、進歩や方向性のある変化を意味しない進化が、なぜ進歩と信じられるようになったのか。ダーウィンとその理解者、そしてその志を継いだ後継者たちが、いかにして優生学に惹かれていったのかを解説する。



ISBN 978-1-4632-4587-0

ISLAM IN CHINA AND THE ISLAMIC WORLD

A History of Chinese Scholarship

志宝 ありむとふて著 Gorgias Press 2024年1月刊

text: 志宝 ありむとふて

中国におけるイスラーム及びムスリムに関する研究についていえば、近年半世紀の間で大量の学術的な成果が蓄積され、一定の学問系統が確立された。しかし残念なことに、学界では長い間中国におけるイスラーム研究学術史に対する個々の研究やシステム整理を行なってきた学者は少ないといえる。本著作では、学術史の角度から現代中国におけるイスラーム及びム

スリム分野の研究歷程及び成果に対する帰納と纏めを行った。つまり、この発展と変化過程における「時代背景」、「人物、機構及びその学術刊行物」、「学会会議」、「参考書と史料整理」、「歴史分野の研究」、「教(経・法・義・派)学分野の研究」、「哲学・政治学分野の研究」、「文化及び他の分野の研究」など学際的研究角度から系統だって整理分析した。

杜の都と南の島で展示のお手伝い

田村光平

(環境情報科学研究分野／准教授)



2016年に東北大学に着任して以来、継続して展示に関わり続けている。当時東北大学に所属していた有松唯氏（現在広島大学）が音信不通になり、学生から助力を請われたことが発端である。以降年に一回ほどのペースで展示を実施あるいは協力している。ちなみに有松氏は頻繁に音信不通になり、安齋正人氏の『考古学者の思考法』にも記述がある。

2023年度は、2つの展示に協力者として関わった。ひとつめは、「Value and Maintenance of "Brokenness"」展である。大学院都市・建築学専攻の授業の一貫として実施された。きっかけは、筆者が代表の学際科学フロンティア研究所領域創成研究プログラム「デジタル技術による災害の記憶の継承：『壊れている』ことの価値と維持に関する学際的研究」に、工学研究科の五十嵐太郎教授に参画頂いたことによる。東日本大震災以降、多数の震災伝承施設がつくられ、国交省の

制度に登録されている。2024年4月時点で、登録数は300を超える。こうした施設には被災したモノが展示されていたり、被災遺構そのものが震災伝承施設として登録されている。これらは壊れていることで被災の記憶の継承に寄与するが、壊れているがゆえに補修が必要になる。しかし、補修するにしても、壊れていることが価値の源泉になっているため、壊れている状態を維持するために補修するという、字面だけみると不可解なことに取り組むことになる。文化遺産の価値は「真正性」を軸にした議論が多く、被災したモノの補修は、技術的に難しいのみならず、壊れている状態の価値の理論化も必要になる。展示されたのは、フィールドワークをもとに、大学院生が制作した、被災した建物のリノベーション案の模型などの作品である。展示も、上述した領域創成研究プログラムの支援を受けた。

2023年12月から2024年2月まで、沖縄県立博物館・美術館で、「旧石器時代の人類—海を越えた最初の人々—」展が開催された。展示の担当は、東



北大学にも在籍経験のある、動物考古学者の澤浦亮平氏である。この展示では、大型類人猿との比較も含めた人類の進化から、琉球列島の旧石器時代人骨まで、国内外の旧石器時代に関する知見が幅広く紹介されていた。筆者は澤浦氏の要請で、この展示のパネルおよび図録の作成に協力した。パネルでは「考古学と数理科学で現生人類の拡散に迫る」と題し、現生人類のユーラシア大陸への拡散に伴う石器製作技術の時空間変異の定量的解析 (Nishiaki, Tamura et al., 2023) を紹介した。

展示は知識流通の一端を担う活動であり、文字に頼らないことで論文や書籍よりも広い範囲に届けることができる。他方で、来館者の「ニーズ」と、評価される研究のあいだのギャップも感じている。筆者の専門に関連づけると、国際誌に掲載される成果は人類史の広い範囲に貢献するテーマであるが、地域の博物館の来館者が求めているのはその地域の過去である。資料の管理や保全のコストを負担しているのは地域の博物館である。人口減少の影響も加味し、展示にしろ、研究にしろ、持続可能性を高めるために、こうしたギャップについてまずはデータを集める必要を感じている（がこのテーマで出した創発的研究支援事業の申請は不採択だった）。

- 1: 「Value and Maintenance of "Brokenness"」展のポスター。
2: 「旧石器時代の人類—海を越えた最初の人々—」展の展示パネル。

編集後記

今号の編集に際し、過去のニューズレターを参照していて、寺山先生が2018年6月発行の77号に書かれていた巻頭言が目止まりました。そこにあった同年実施のロシア大統領選挙の様子は今年のと全く変わらず、同じことが繰り返されているのがわかりました。この国もいつかは変わるのでしょうか。（後藤章夫）



東北アジア研究センターは、文理連携・学際的なアプローチによって、シベリア・モンゴル・中国・朝鮮半島・日本における歴史・社会・自然を総合的に捉えることをその使命とする研究組織型組織です。

東北大学東北アジア研究センター
ニューズレター 第101号

2024年6月24日発行

編集：東北アジア研究センター広報情報委員会
発行：東北大学東北アジア研究センター
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41
TEL 022-795-6009 FAX 022-795-6010

Facebook
をチェック!



X (旧Twitter)
をチェック!

